

## 大学放浪記 (15)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では新しい職場としてのマエジョ大学の付属農場にある再生可能エネルギー学部、かつてのチェンマイ大学卒業生について記す。

週末を挟んだ前の週に、チェンマイ大学滞在時の学生の一人から電話が入った。昨年コンケン大学からマエジョ大学に移った直後も、連絡が入りわざわざ会いに来てくれた。勤務先は当初日系企業であったが、その後欧州系の企業に転職し、現在も同社に勤務しているがコロナ禍でリモート勤務が多いということであった。当然週末に会うつもりでいたが金曜日の昼頃電話が入り、今日の夕方、伺うが都合は良いかという問い合わせであった。当初は同じようにチェンマイ大学の卒業生などを含め4人ということであったが都合が悪くなり2名になったと言う。都合も悪くないし、断る理由もない、ましてや日程は決まっていなかったが約束はしていたのだから積極的に会うことにした。1, 2日予定が早まったに過ぎない、と言う事で時間を設定してアポイントをし、約束の時間に彼らの来るのを待つことにした。さて、話を少し戻して新しい職場である再生可能エネルギー学部への日常生活の経過について記す。これまで学長室の隣にある副学長室のオフィスを一時的に間借り(?)して居た背景には、受け入れ大学側の良さ的措置の準備、契約内容など時間がかかるので、取り合えず別のプロジェクトに身を置き、正式なポストでの雇用が決まるまでの処置である。しかし仕事の内容によりその都度、正確な仕事の内容を記した書類に基づき、労働許可を取り、またそれに付随したビザの延長など、ややこしいプロセスを4ヶ月で2回移民局を訪れ書類での処置を済ませた。しかし、既述したように、外国人の雇用は基本的(あるいは一般的)に1年ごとの契約更改であるので延長しても1年を超える事はない。言うまでも無く契約延長は可能であるが、その条件はTOR (Terms of References) の達成度に依存する。さらに、雇用延長か、総出ないかは最終的に大学側が判断決断する。言うまでもなく1年間の契約内容に基づく仕事の達成度への評価で決まる。と言うわけで、正式に再生可能エネルギー学部への配置が決まり、大学の管理棟を離れることになった。再生可能エネルギー学部は **School of Renewable Energy** と言うが、**School** は学部 (**Faculty**) と同じレベルの組織で正確な区別が難しいので、筆者は敢えて学部と訳している。大学によっては学科のような組織、ユニットを指す場合もある。この学部は最近新設された新しい組織で、在籍学生数は学部大学院を含め、総数600名程度と言う。マエジョ大学より筆者に用意された宿舎は学長室のある大学管理棟まで徒歩で10分程度で、規模としては家族用なので部屋が3つ(そのうち寝室が2つで、1つはオフィス(机と椅子)を兼ねている)、キッチン、シャワー、トイレ、ベランダがあり広大なスペースを有する。勤務場所が変わると本来なら宿舎も変わる必要もあるが、今のところ何とか筆者の意向を尊重して貰っている

ようである。なぜなら、筆者は再生可能エネルギー学部に移ると現在のアパートからの通勤は片道およそ5~6キロ有るので徒歩で約1時間以上要する。よく知られたようにタイでは雨期と乾期の2つのシーズンがある。徒歩での通勤、あるいは自転車での通勤は可能であるが、雨期には手荷物を持つての通勤はいささか面倒である。再生可能エネルギー学部にも宿舎はあるが当然のことながら規模は小さく、家族用の部屋とは比較にならない。しかし学部の新設と同時に宿舎も新設されたが、現時点で宿泊している者は居ない。全ての設備が新品であるが誰も宿泊していない理由は他にもあると考える。すなわち、大学本部がある近隣地域は、言うならば都会的でショッピングなども便利で、距離的にも、時間的にも、また欲しいものも比較的探しやすい。こうした条件を考慮すると、自ずと大学の管理棟に近い現在の宿舎が条件を満たしていることになる。そこで筆者が出した結論、あるいは要望は現在の宿舎と新学部の宿舎の両方を借りるというものである。とりあえず寝起きして生活するに必要な最小限の物を学部の宿舎に運び込み、しばし様子を見る、というものである。雨期になり毎日の通勤がややこしくなる場合には宿泊するという身勝手な要望である。新職場に通い始めて、未だ1週間ほどで有るが通勤も継続すると、日毎に通勤距離が縮まったかに感じる今日である。最初は時間もかかり、遠く感じた距離も沿道の景色を見慣れてくると距離感が縮まって来るのを感じる。心に残る要望は、一応働く場所と環境は整ったが「これから何を、どの様にするか」である。しかも未だ先の見えぬコロナ禍の中でと言う条件も考慮する必要があるが・・・。現時点での贅沢な不満は、もっと仕事が欲しいと言うところであろうか。丁重な対応を受けていて、贅沢を言うなと言うところであるが、敢えて言わせて頂ければそんなところではなかろうか。勤務先が変わる度に問題がないわけではない。例えば新しい鍵の数が増える。自身のオフィスの鍵を初め、共通の場所、施設に出入りするために必要な鍵など、ハード的な鍵に加え個人の指紋を検出して作動する鍵など一挙に鍵束が増える。指紋検出 (Finger print) による鍵は便利であるが、残念ながら担当者が最近他界し、あらたに新規登録できない状況にあると言う。こうした問題も労働気力を下げることにもなる。そのうち改善されることを心待ちしている今日である。

そうした生活の繰り返しのもとで上記した様に、かつてのチェンマイ大学の卒業生からの「会いたい」と言う連絡である、嬉しく無いはずがない。アポイントの設定時に彼ら2人が車で筆者の宿舎まで来てくれた。久しぶりと言うことと、彼らがタイ人であること、さらに食事の後にショッピングができること、などを勘案して迷わず日本食レストランに決めた。きわめてオリジナルな日本食に近い味であることなど、日本を思い出させる雰囲気を感じさせる。その日本食レストランは大きなマーケットの一角に位置し、日本食の素材(納豆、うどん、そば、わさび、漬け物、長芋、など)が多く揃い、ほとんど何でも入手が可能であるので、そのレストランに決めた。頻繁ではないがたびたび食べに出かけているのでお女将さん(タイ人)とも親しくなり、気軽に出向く気にさせる。筆者を訪ねてきた2人の卒業生は、いずれも筆者が立ち上げた「3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム」で中国、インドネシアでのイベントに参加したことのあるかつての参加者であ

る。当時を懐かしむ思い出話や、当時と比べて今の大学がどの様になっているのかなど、尽きぬ話題が次々と出てきて、過ぎた昔と現在の違いに驚きを隠せない一面もあった。約2時間余の夕食会で楽しい気分を満喫し、久しぶりに飲むビールの味はまた格別で有り、この年になっても飲むビールのうまさ、特に最初の喉ごしを通り過ぎ、食堂を通過して胃袋に達する直感表現のしようが無いほど美味しい。飲んだ後はしばし言葉も声も出ない感動にも似たうまさである。この感触を未だに味わえることに心より有り難く、感謝をたい。このときの感触を日本語ではなかなか表現できないが、タイ語では「チューン・チャイ」と言う。かなり以前にこの表現だけは覚えておこうと記憶にとどめておいた。いうならばこの言葉を表現したいばかりにビールを飲むような感じである。現地のタイ人も思わぬ表現を日本人の筆者がして居ることにびっくりし、急に親近感を覚えるらしい。言葉が取り持つ人間関係の更なる方法でもある。上記した様に限りなくオリジナルな日本食に近い味を秘めたこのレストランでの日本食メニューは心を和ませる効果もあるようである。タイでは豚や牛、鶏の肉を油で揚げた揚げ物は一般的であるが、野菜の天ぷらは非常に少なく、一般の店では余り見かけない。それだけに、このレストランに来たときは、ここぞとばかりに野菜の天ぷらを食べるようにして居る。もちろんオリジナルな日本食に限りなく近いと言う表現からも、エビの天ぷらを添えられた「天つゆ」に大根おろしを入れて味わうのも極めてうまい。彼らも大変喜んでくれて、本当に良かったと心から感じている。わざわざ夕食を共にするべく訪ねてきてくれて有り難うと言う一層の謝意も出てくる程嬉しく感じる。振り返って数えてみると上記した「3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム」に参加してから7年ほどになると言う。1994年に立ち上げたこの事業は昨年(2021年)、27回目を迎えた。残念ながらコロナ禍で直接参加はできず、ホスト大学以外の大学からの参加者は全てがオンライン参加と言うことであった。かつて同じ年月を共有した若者達が元気に、逞しく生きている姿を見ることが出来る事はこの上ない幸せで有り、この事業を立ち上げて良かったという満足感と安堵感が入り交じる。彼らの中には既に結婚し子供をもうけ、母となり父となり、一家を背負って社会に貢献している。彼らは人材育成事業の人的収穫物であると考え、さらなる頼もしさを感じさせる。マエジョ大学の再生可能エネルギー学部を案内された時も、筆者を知るかつてのチェンマイ大学の卒業生の一人に会った。こちらは数ある卒業生を一人一人覚えている事は難しいが、相手は覚えていて、当時は学生であった。貴方には昔あった事があると懐かしく話しかけてくれる。このような話は既にこのシリーズでも随分昔の経験の一例を紹介したと記憶する。あらためて簡単に紹介しておく。チェンマイから北上しラオスの国境に向かう途中でチェンライと言うところがある。この件にメファ・ルアン大学と言うのがある。たまたま別の所用で立ち寄った時に、国際交流関係の部署を訪ねた、というよりも偶然立ち寄る事になったが、筆者にとっては、この大学訪問は初めてであった。出てきた女性の副主任が、筆者が挨拶をすると同時に「私は貴方を知っている」と言って親しげに近寄ってきた。「何故？」といぶかって居ると「3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムに参加した事があり、その時貴方

は基調講演のスピーカーであった」と言う。顔も名前も覚えていなかったが、嬉しい話である。事業を始めた協定大学はチェンマイ大学であるが、その在籍時に事業への参加を経験し、今は別の大学に職を得て、その重要な席に座して居る。嬉しい限りである。現在も続く同事業に参加したかつての学生の総数は2000名を悠に超えると想像する。必ずしもタイ人ばかりではない。中国人、日本人、さらには3つのホスト大学に限らず、フィリピン、マレーシア、ラオス、インドネシアなど他のアジアの大学からも事業のホスト大学の協定締結校として参加の機会を得ている。彼ら事業参加経験者にとってこの事業が心に残る、そして自分の人生を見つけるひとつの過程を作ったかと考えるといくらかでも教育を通じて、アジアの大学に人材育成で社会貢献でき、国際化の意識啓蒙に寄与できたのではないかと誇りに思う（と言ってもこれは筆者自身が勝手にそう思っているだけであるから余り意味はないが・・・。第三者の評価が大切である事は言うまでもない）。

翌日朝、再生エネルギー学部に出向くと、あいにく鍵がかかり入れないドアがあり仕方なく知人に連絡しようとして居ると、一人の若者が自分のオフィスに入るべく指紋検証を為して入って行く時、貴方もどうぞと声を掛けてくれた。それに応じて自分のオフィスに入ると、しばらくしてその若者が訪ねてきて、「私は、こう言う者です。貴方をよく知っております。チェンマイ大学に貴方が10年以上もおられた事も知っています。殆ど毎日貴方を見かけました」と言う。そして名刺を差し出して、隣の部屋に居ますから何か困ったことがあれば、いつでも連絡下さい、と言ってくれた。いろいろ聴いてみると同じ工学部の同じ学科で有り、道理で殆ど毎日顔を合わせて居たのかが窺えた。ここにも自分を知る者が居たのかとびっくりすると同時に、懐かしさもこみ上げてきて非常に救われた気持ちが体の中を駆け巡った。一般にタイの大学の教員の多くは初めて会っても名刺交換する人は少ない。それだけに驚きでもあった。筆者は講義においても何時も学生には必ず名刺などを用意して何時でも連絡できる準備を為しておくべきと強調してきた。もちろん上記の「3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム」参加学生にも、学術論文の発表のみがこの事業の目的ではない。国際的常識、エチケット、マナーのひとつとして名刺を自分で作成用意し、自らのネットワークを拡げるようにすべきと助言もしてきた。ひょっとするとその教え(?)が通じていたのかと勝手ながら解釈し、こみ上げる嬉しさをそっと締まっておいた。別の知人である教員にその話をすると、その若い教員のことをさらに話してくれた。チャンマイ大学の学部、修士、博士課程を終えて今ここで教員として働いていると聞いた。筆者のチェンマイ大学滞在中ずっと一緒だったことになる。筆者の講義などの履修、聴講をしたかどうかは聴いていないし、また論文などの直接指導は為なかったが、いくらかでも彼の記憶に自分が残っていることは嬉しい。あまり多くの貢献もしないのに、厚かましくあたかも自分の手柄のような表現は為たくないし、するつもりもないが、これからも教員として立派に頑張りたいと願う気持ちに変わりはない。また、此処でももう一つの貴重な財産を見つけた様な気持ちである。



3 大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム参加者との再会と夕食



再生可能エネルギー学部の建物の屋上には太陽光パネルが一杯敷き詰められている